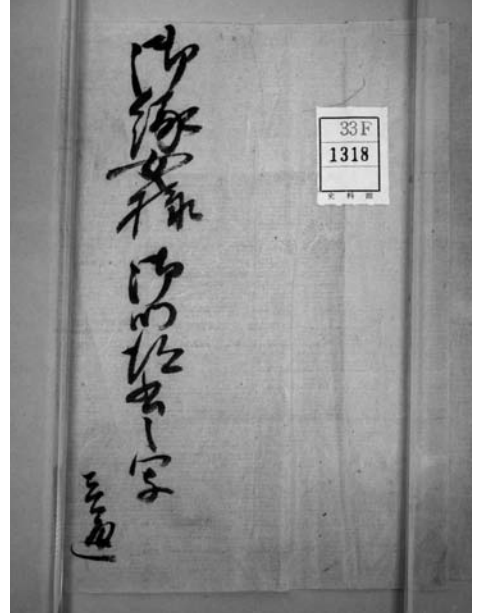
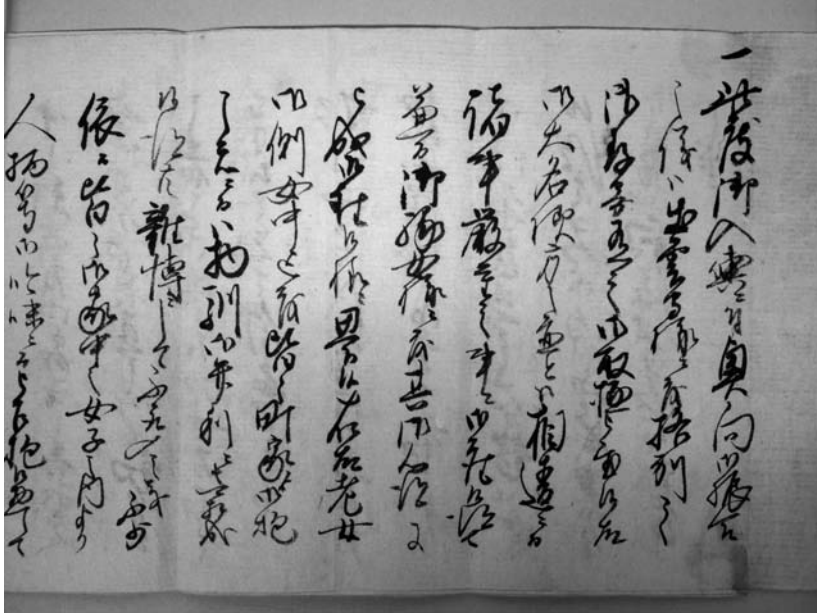


ある公家の姫君の一生



御縁女様御心得之写（山城国京都久世家文書）

京都久世家文書は二三〇〇点に及ぶ堂上公家の史料群である。久世家は平安時代中期の村上天皇の皇子を祖とする村上源氏の家柄であり、江戸時代に村上源氏の嫡流の公家から分家して成立した。江戸時代の公家社会を研究する上でしばしば用いられており、特に利用頻度の高い当主日記や役所日記は「収蔵歴史アーカイブズデータベース」で画像公開を行っている (<http://base5.nijl.ac.jp/archicol/>)。ここではまだ画像公開をされていない史料を用いて、ひとりの女性の一生を描いてみたい（ ）は文書の請求番号。

その女性の名は布喜姫。父は堂上公家の久世通根で、正二位権大納言まで昇進した公卿である。布喜姫は一七七九年に誕生し、一七九九年に二十一歳で越後国新発田藩主・溝口直侯に嫁ぐこととなった (1318)。その際、溝口家より「御縁女様御心得書之写」と記された書付が送られている (1318)。内容はまさに溝口家に嫁ぐに当たっての「心得」であり、主に次のような事柄が記されている。①溝口家は他の大名家と異なり諸事嚴重の取り締まりであるのでそのように心得るように、②老女・女中は新発田藩家中の者から人物を選んで召し抱えること、③髪型・化粧に好みはないが華美にならず質素にするように、④お殿様は朝ハツ半時に起き、夜は五ツ時に寝ることが決まっている、⑤お殿様は江戸での神社参詣を好んでおられない、⑥タバコを吸うのは構わないが、お殿様は吸わない、⑦三味線・謡も好まないなどである。何とも堅苦しい書付を目の当たりにした布喜姫の気持ちはどのようなものであったのであろうか。

そうは言っても一歳年上の夫である直侯との間柄は良かったのかはわからないが、二男一女を儲けている。そのうち一人が次の代の新発田藩主・直諒である。

だが、一八〇二年、直侯は二十五歳の若さで亡くなってしまい、わずか二十四歳で未亡人となった布喜姫は剃髪して宗徳院と名乗る。その後、四歳の直諒が藩主となるが、布喜姫こと宗徳院が藩政に関与した様子はうかがえない。溝口家側の史料にも詳細が分かる史料は見えない。

一八二三年冬、宗徳院は病のために京都へ戻ることとなった。しかし、実家に住むことなく借家住まいをすることとなった (1318)。実父はすでに亡くなっており、兄が公卿となっていたが、なぜ実家に住めなかったのか、判然としない。宗徳院はこの頃からすでに体調が悪かったようだが、その原因について兄・久世通理が執筆した「溝口宗徳院殿凶事雑記」に「元來過酒」と記していることから長年の飲酒が宗徳院の体を蝕んでいたようだ。彼女は「何か」を酒で紛らわしていたのかもしれない。一八三一年三月十九日、死去。遠路を理由に溝口家の菩提寺ではなく、久世家の菩提寺に埋葬されることとなった。

(西村慎太郎)